

## 教材をめぐる自由に話せることの楽しさ

——シンポジウムを振り返って

戸田 功

目前に迫るタイムリミットに追い立てられるように今回のシンポジウムのテープ起し(学生のバイトです)の文章に目をやったとき、あの場で自分は一体何を話っていたのかと、しばし茫然としてしまった。「…ちよつと、その一通り色々聞かせてもらったんですけど、先ほど私が言い忘れたかなと思っただけは、教育点検における法の敵対者として子どもを設定しましたが教える内容に関して、我々は知っているという錯覚、正解だから教えなきゃという錯覚を持つてはいけないと考えています。だから、私は二つの方法的他者が必要だと考えています。文学と出会う子どもの問題は方向的他者といっても、子どもは文学と勝手に出会ってしまうので、(段落変わる)例えば、私は田中さんを子どもと同じだと考えていて、「……、私の話はこんなふうにはしか聞こえていないのか。…まるで酔っ払いの独り言ではないか。そう考えると、色々と思いがたることがある。けれども、ご一緒した鶴田、田中、山本、齋藤各氏の発言を読んで

みると、彼らの話しているところは良くわかる。その上、私の発言の内容をちゃんと受け止めてくれているではないか。何とすばらしい人たちだろう。そこで、私はようやく、自分が話そうとしていたことを思い出した。私は俄然気を取り直し、このまま甘い加減に放っておいても読者の印象は変わらないかも、という甘い誘惑を断然退けることにした。少なくとも私には分かる程度にまで、朱を入れてみよう。というわけで、当日の私の発言の意図したところは、読者がその気になりさえすれば、ある程度理解可能になったのではないかと思う。

けれども、そんなことをしている間にも時代は進んでいて、テープ起しの直しのためにお互いの間に原稿をやり取りしているうちに、後で書いていただいたコメントの欄では当日の話し合いの続きが、鶴田さんと田中さんとの間で始まっていたのであった(そのきつかけは、私ども編集部の不手際に由来しています。田中さん、鶴田さん、失礼の段はこの場を借りておわ

びいたします)。ということ、私が一番「後出しじゃんけん」になるのかなとも思うが、田中さんは私の発言にも触れて下さっている、一言書いておかなければならないと思う。

田中さんが書かれていることは三点、まず一つは文学研究の専門的議論から見た「小説」と「物語」の区別の必要性と、そこから見て「ごんぎつね」は「小説」ではないということ。次に、シンポジウムの席上で戸田が鶴田さんに、「文学」に出会っていないのではないかと一見失礼な推量の確認をしたことについて、戸田の言おうとしたことを代弁して下さったこと。そして三つ目に、教科書教材について、文学の「毒」を排除する形での「教科書会社の自主規制」に疑問を呈し、文学の「毒」を、それを「薬」として作用させる「読み方」とともに教材化することが今強く必要であると考えること。この三点について、田中さんは鶴田さんに宛てて返答を求めるといふ、いわば公開書簡の形で原稿を寄せて下さったのであった。我々読者としては、鶴田さんからのお返事か、場を改めての議論の続きをいつ期待してしまう。ぜひ実現してほしいものである。

さて、ではここで、私としては何を書くべきであろうか。田中さんは私の代わりに立派な弁明を行ってくれて(こんなことは私の人生経験上初めてのこと、田中さんがいかに人間として筋が通っているかということを改めて知りました)、とても感謝しているのであるが、当日の鶴田さんへの私の発言は、私の言い過ぎとして撤回したつもりであった(考えてみれば、私は鶴田さんの研究者としての誠実さを高く評価しているのであって、鶴田さんの研究者としての一貫性からは、わざわざ言

わなくても鶴田さんは文学に出会ったことになっていなければおかしいわけである)し、鶴田さんは本当に紳士的な人なので、田中さんがわざわざ私をかばって、あの発言が私なりに鶴田さんを評価したつもりであったことを言い添えてくれたのには、深いわけがあるのかもしれない。そこで、以下、私なりにその理由を考えてみた。

あれこれ考えてみたが、結局、田中さんは文学が関係する教材について話すことが大好きで、もつともつと楽しみたいのであるが、なにせ専門家であるから一方的に拝聴されることばかりで、少々退屈されているのではないかと思いついた。実際、子どもとの関わりの中で、どのような教材をどのように使い、生かすことが出来るか、どのように楽しませ、味わわせることが出来るか、時にはそれが衝撃的なくらい充実した経験を与える可能性はどこにあるのか、等々、そういつたことについて立場を超えて自由に話せることは、とても楽しいことである。まして田中さんは、文学の持つ価値を深く探求しようとしている人であるから、文学を子どもとの関わりの中で生かそうとする、このような話は、楽しくないはずがないのである。そして、田中さんは鶴田さんとの、この「自由」な話し合いをもつと続けて行きたいと思っているのではないかと私は考えたのである。教材をめぐる楽しく話せるためには、お互いが「自由」を確保している必要がある。けれどもそこに、もしかしたら若干の障害が発生するかもしれないという危険性を、田中さんは察知したのではないか。それは、よせばいいのに、戸田が鶴田さんに向かって、あなたは「文学」に出会っていないのではないかと

などと言ってしまったからである。鶴田さんは良心的な人だから、自分が「文学」に出会っているかいないかということ、あの場で明言しなかったことを気にしていないとは言いきれない。戸田はそのことをどうでもいいことのように思っているらしいが、あのようになり出されることで、逆に「文学」に出会っていることの有無が注目の的になり、重要な問題とされてしまうかもしれないのである。そうになると、文学の教材をめぐって、お互いに「自由」に話せなくなってしまうのではないか。確かにこれは、「楽しさ」という点において重大な危機である。

というわけで、田中さんは、鶴田さんとの楽しい話し合いを続けられるように、戸田の失言を改めてフォローしてくれたのではないか、というのが、私がたどり着いた結論である。子どもにとってだけでなく、「楽しい」かどうかはとても大切なことである。そしてあれは、私にとっても、すばらしく楽しいシンポジウムでした。鶴田さん、田中さん、また続きをやりましょう。山本さん、有難う。またよろしくお願いします。

